

『とうきょうの社会』1968年1月（東京書籍）

*** 社会の学習あれこれ ***

ノートははたして必要なのだろうか

矢口 新

ノートをとるなどというと、私はもう30年前の大学の講義を思い出す。教授が話をするのをいっしょうけんめいノートにとるのだが、教授によっては、ノートを取りやすいように、いやノートに書きうつすためにしゃべってくれる人もいた。中には早くしゃべるのでそのままノートにとれないで、要領筆記になるのもあった。速記術をならうとよいと思ったりした。

ノートをとるのが大学の勉強だと思っていたから、いっしょうけんめいだったが、今から思うと、まったくたわいのない活動だった。ノートはとっているがいっこう頭をはたらかすことになってはいなかった。字を書く練習にはなったかもしれないが、それも早く書く練習にはなっても、正しく書く練習にはならなかったようだ。それでもそれが勉強だと思っから、ノートをとるともう勉強も終わり、1年の終わりに試験があるが、それが近づくまではただノートを書きつづけるだけであった。見直すなどということとはしなかった。たまに読んでみても、試験の時におぼえるだけがノートの役割と思っているからそれ以上ノートの中味を検討することもなかった。こう考えると、ノートをとるとは何をしたことなのかわけがわからない。

今の学生に聞いてみても、だいたい同じようなことをやっているらしいが、まったく驚いたものである。なんとばかばかしいことが、よく何十年も続くものだと思う。こんな思い出がノートについてはまっ先に頭に浮かんでくるが、ノートについての日本

人の根本的な考え方は、大学だろうが、中学校だろうが、小学校だろうがたいしてかわらない。小学校、中学校の方が、より教育的に考えられているとって、間違いのないであろう。しかし、それも程度の問題であって、基本的な考え方がかわらなければ、五十歩百歩である。

アメリカにいる私の友人が、自分の子どもがアメリカの小学校に通っているので、ときどき学校の参観に行ったり、日本のことを話しに行ったりすることがあって、そういう経験からアメリカの教育と日本のそれとのちがいを感想として話してくれたことがあった。まったくの教育の素人であるが、なかなか核心をついた感想であった。

アメリカでは教科書をおぼえるということは、もうほとんどなくなっているのに、日本はまったく教科書によった学習をしている。そのちがいが非常に大きいのでおどろいたというのである。日本ではよくみると、何から何まで、教科書にしたがって、授業がすすんでいる。まったく教科書をたいせつにしている。みんな、教師も生徒も、1冊の教科書をありがたがって、おぼえようとしている。アメリカではそういう力をもっているものは、ワークブックである。何をしろ、かにをしろと書いてあるワークブックで、日本のそれと非常にちがうが、アメリカではワークブックと称している。子どもの活動はそれによって導かれる。子どもはそれにしたがって、それから教科書を見る。それもひとりでなく何種類

もみる。おぼえるというより、ワークブックの命じる作業をするのである。**ものの見方を身につける**のである。たとえば、日本の警察官のことをだれか日本の人に話してもらい、そして、これこれのことを整理してみろというように書いてある。私の友人はそういう時に学校の子どもに頼まれて話しに行ったらしいが、そこで勉強している子どもの、生きた勉強のしかたにつくづく感心したというのである。

ここには、授業の形の問題ばかりでなく、勉強とか学習というものについての根本的な考え方のちがいがあつたことを感じる。**作業をしながら、頭を働かすところが勉強**なのであつて、そこに書かれたことをおぼえるのでない。構えがちがうのである。社会をさぐつていき、ものをみて整理していく活動が、その人間の行動力を育てるのである。だから人間の何を育てるかということについての考えがちがうといつてもよい。教育の目標がちがうのである。いわば、教科書をおぼえるという教育は人間不在の教育であるといつてもよい。

日本人の教育の考え方の根底には、人間自身でなくある人間の書いたもの、言ったことをたいせつにして、それを**自分で書いたり言ったりする能力**を育てようとする考え方がすくないのである。教科書に書かれたことは、要するにだれかが考えた結果であつて、それをおぼえるのが教育の目標ではないはずである。そういうことが自分でできるようになることが教育の目標である。その点が忘れられているのである。

ノートを使うという考え方の根底には、教科書についての考え方の中にあるものと同じ考え方がひそんでいる。板書されたことをノートに書いておく。本をよんで書きうつしておく。よく生徒がノートに百科事典か、学習事典から書きうつしたものを、わけもわからないままに、読んで発表している姿を見かけるが、これなどはノートについての考え方をもつともよくあらわしている。ノートは教科書とおなじ系列で教育の中に位置づいているのである。

ノートの使い方を問題にするにしても、根本にある学習についての考え方を問題にしなければならない。その点に変革がなければ、ノートを使うということも本格的に生み出すことはできないのである。ノートを使うなどということは、教師が随時臨機応変に指導してゆくもので、あるきまった形を人は教えられて、そのままやっておればよいというものではない。だから教師の基本的な考え方がたいせつなのである。いかに生徒を行動させるか、**生徒の能力の開発になる作業をやらせるか**という点で、ノートを活用しなければならないのである。たいせつなのは教師の考え方の転換である。

社会を学習するというのは、どういうことであろうか。これまでの考え方ですと、社会はこうなつていふことを教えるのだと考えられがちである。社会はこうなつていふことを教えるとなつて、社会のことをことばで説明するといふことになる。社会の人々の活動でも、意味でも、構造でも、目に見えるもの、具象的につかまえられるものは少ないのである。そこに教科書に書かれたことばをそのままのみにおぼえようとする。

しかし、それは、そのことばをおぼえただけでその人間が社会の姿をみる力をつけたことにならない。社会を見る能力を身につけたといふのは、具象的に見える人間の行動やものの姿から意味をよみとる力を身につけることである。具象的なものから、意味あることばを表現することができるといふことである。そういう能力を身につけるには、そういうこと自体をやらなくてはならない。社会の具象的な姿をみて、そこから意味を引き出すドゥーイングが社会の学習なのである。ここでドゥーイングといふのはラーニング・バイ・ドゥーイングのドゥーイングである。

さて、そういうドゥーイングがなされるためには、社会の姿を見せるものがなくてはならぬ。それは究極には、社会の現実そのものであるが、いきなりそ

ういう現実にはぶつかってもなかなかつかめない。そこに至るステップが考えられる。低学年で、比較的典型的な町や村の姿を見せて、そこに町や村の基本的な機能を見せているのは、その一つの例である。いわばわかりやすい事実を出して見せる。それは多少現実からはなれているかもしれない。しかし、単純化して、町や村を見て行く一つの尺度を与えようとしているのである。これは一つの例であって、町や村という社会の単位を見る場合のみでない。生産の問題をみる場合も、その条件をみる場合も、いずれもはじめはわかりやすい典型から入るのである。

さて、このようにして社会を見る練習をするのが社会科の学習として重要であるとなると、一番たいせつなものは、社会の姿をみるためのさまざまな指標である。統計やグラフなどというのはすぐ思いつぐが、もっと具象的なものでも、比較することによってその意味をつかむことはできる。たとえば建築物でも農村と都会のちがいはある。それは、その社会の何かの意味を表現しているのである。そういう材料が今の社会科では非常に少ない。

つまり子どもが自分の眼をはたらかし、社会の姿を見ぬくための材料が少ないのである。教科書にもことばばかりがいたずらに多くて、材料がないのである。そういう材料は教師自らがこれを生徒に提示する努力をしなくてはならない。これはたいへんなことであって、現代の教師はそういう努力をしない習慣になってしまったが、それでは教育にならない

のである。今後そういう方向に教材整備の努力が行なわれるようになるまでにはかなり時間がかかろう。それがおくれれば、おくれるほど日本の教育がおくれることになるのである。現在でも世界的な動向からみると、かなりおくられている。その中から生まれる将来の日本人は**社会をみること**の能力が低下する。

これからの社会はますます複雑に、機能的になってくる。現代の日本人の程度で社会を見ていたのでは、いつまでたっても悪い政治は改まらない。日本の社会は悪くなるばかりである。福祉国家も、文化国家もかけ声ばかりで、実際は悪がしこい動物的人間ばかりになるであろう。つまり現実の社会を見て正しく判断することができないのである。したがって正しい行動のしかたがわからないのである。

ノートの使い方から出発して、だいたいが大きくなったが、根本的なことを忘れて、ノートの使い方という技術の問題をいくら究明してもしかたがない。黒板に書かれたことをきれいに清書することは悪くはないが、それだけではあまり意味のないこともたしかである。ノートはあくまでメモである。自分で見たことを整理するプロセスで必要になるのである。そういう場面で使われなくてはならない。何をみて、何をよみとるか、そのプロセスでノートを生み出すのであろう。ノートでなく、**作業カード**のようなものをくふうするのはどうだろうか。

(プログラム教育研究所)